

資治通鑑 第 218 卷

【唐紀三十四】 起柔兆涸灘五月，至九月，不滿一年。

■唐、続国訳漢文大成 經子史部 第 12 卷 267p

肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝上之下至德元載（丙申，756年）

【郭子儀・李光弼の常山奮闘】

■【虢王の巨は南陽に向う】五月，丁巳(53)，昊の衆は潰え(潁川より走る)，走りて南陽を保ち，賊は就きて之を圍む。太常卿の張垪は、

「夷陵(峽州)太守の虢王の巨は勇略有り」

と薦し，上(玄宗)は吳王の祗を征して太僕卿と爲し，巨を以て陳留(汴州)、譙郡(亳州)太守、河南節度使と爲し，嶺南節度使(この年五府計略討撃使を併せて嶺南節度使と爲し 22 州を領し、廣州に治す)の何履光、黔中節度使の趙國珍、南陽節度使の魯昊を兼ね統べしむ。國珍は，本は牂柯(別部充州の蠻酋長趙君道の裔)の夷也。戊辰(4)，巨は兵を引いて藍田より出で，南陽に趣く。賊は之を聞き，圍みを解いて走る。

■【旧知の令狐潮と張巡】令狐潮は復た兵を引いて雍丘を攻める。潮は張巡と舊有り，城下に於いて相い勞苦すること平生の如し，(12-268p)潮は因りて巡を説いて曰く、

「天下の事は去れり矣，足下は危城を堅守す，誰が為にせんと欲する乎？」

巡は曰く、

「足下は平生は忠義を以て自ら許す，今日之舉は，忠義は何くに在るや！」

潮は慚じ而して退く。

■【郭子儀・李光弼は漁陽路を絶つ】郭子儀、李光弼は常山に還り，史思明は散卒數萬を収めて其の後を踵む。子儀は驍騎を選びて更に挑戦し，三日，行唐(漢の南行唐郡、常山郡に属す。直隸省保定道、現・河北省石家莊市行唐県)に至り，賊は疲れ，乃ち退く。子儀は之に乗り，又た之を沙河(新楽・行唐の間にあり)に敗る。蔡希德は洛陽に至り，安祿山は復た歩騎二萬人を將いて北に思明に就か使め，又た牛廷玠をして范陽等の郡兵萬餘人を發して思明を助け使め，合わせて五萬餘人，而して同羅、曳落河(胡語で勇士の意味)は五分之一に居る。子儀は恆陽に至り，思明は随つて至り，子儀は溝を深くし壘を高くして以て之を待つ。賊は來たりて則ち守り，去れば則ち之を追い，晝は則ち兵を耀かし，夜は其の營を斫り，賊は休息するを得ず。數日，子儀、光弼は議して曰く、

「賊は倦む矣，以て出でて戦う可し。」

壬午(18)，嘉山(常山郡の東)に戦い，大いに之を破り，斬首は四萬級，捕虜は千餘人。思明は馬より墜ち，露髻跣足して歩いて走り，暮に至り，折槍を杖にして營に歸り，博陵に奔る。光弼は就いて之を圍み，軍聲は大いに振う。是に於いて河北十餘郡は皆な賊の守將を殺し而して降る。賊の往來する者は皆な輕騎にして竊に過ぎ，多くは官軍の獲る所と爲り，將士の家の漁陽(范陽)に在る者は心を搖らせざるは無し。

■【安祿山は田乾真に励まされる】祿山は大いに懼れ，高尚、嚴莊を召して之を語りて曰く、

「汝は數年我に反を教え，以て萬全を爲す。今潼關は守られ，數月進む能わず，北路は已に絶え，諸軍は四合し，吾の有つ所の者は汴、鄭の數州に止まり而して已む，萬全は何くに在るや？汝は今より來たりて我を見る勿れ！」

尚、莊懼は，數日敢えて見ず。田乾真は關下より來たり，尚、莊の為に祿山を説いて曰く、

「古より帝王の大業を經營するに、皆な勝敗有り、豈に能く一舉に而して成らんや！今四方の軍壘多しと雖も、皆な新たに募る烏合之衆なり、未だ行陳を更ず、豈に能く我が薊北の勁銳之兵に敵せん、何ぞ深く憂えるに足りん！尚、莊は皆な佐命の元勳なり、陛下は一旦之を絶ち、諸將をして之を聞か使めば、誰か内に懼れざらん！若し上下心を離せば、臣は竊ち陛下の為に之を危ふむ！」

祿山は喜びて曰く、

「阿浩、汝は能く我が心事を豁けり。」

即ち尚、莊を召し、置酒して酣宴し、自ら之が為に歌い以て酒を侑め、之に待つこと初めの如し。阿浩、は乾真の小子也。祿山は洛陽を棄て、走りて范陽に歸るを議し、計未だ決せず。

【唐政権内の不協和音、潼關おちる】

■[楊國忠は哥舒翰を疑う]是の時、天下は楊國忠の驕縦にして亂を召くを以て、切齒せざるは莫し。又た、祿山の兵を起こすは國忠を誅するを以て名と為し、王思禮は密に哥舒翰を説き、抗表して國忠を誅せんと請わ使め、翰は應じず。思禮は又た、

「請う、三十騎を以て劫取して以て來たり、潼關に至りて之を殺さん。」

翰は曰く、

「此くの如くならば、乃ち翰は反するなり、祿山に非ざる也。」

或は國忠を説く、

「今朝廷の重兵は盡く翰の手に在り、翰が若し旗を援りて西を指せば、公に於いては豈に危うからず哉！」國忠は大いに懼れ、乃ち奏す、

「潼關の大軍は盛んになると雖も、而も後に繼ぐ無し、萬一利を失えば、京師は憂うる可し。(12-269p)請う監牧の小兒三千(監牧五坊禁苑の卒を小兒という)を選び苑中に訓練すべし。」

上は之を許し、劍南軍將の李福德等をして之を領せ使む。又た萬人を募りて灊上に屯せしめ、親しむ所の杜乾運をして之を將せ令め、名は賊を御ぐと為すも、實は翰に備える也。翰は之を聞き、亦た國忠の圖る所と為るを恐れ、乃ち表して、

「請う灊上の軍を潼關に隸せん」

と。六月、癸未(19)、杜乾運を召して關に詣らしめ、事に因りて之を斬る。國忠は益々懼れる。

■[哥舒翰は出陣を督励される]會々告げるもの有り、(安祿山の反間の計)

「崔乾祐は陝に在り、兵は四千に滿たず、皆な羸弱にして備え無し」

と、上は遣使して哥舒翰を趣し兵を進めて陝、洛を復せんとす。翰は奏して曰く、

「祿山は久しく用兵を習い、今始めて逆を為す、豈に肯えて備え無きや！是れ必ず羸師以て我を誘うなり。若し往けば、正に其の計中に墮ちん。且つ賊は遠來にして、利は速戰に在り。官軍は險に據りて以て之を扼す、利は堅守に在り。況んや賊は殘虐にして衆を失い、兵勢は日々に蹙まる、將に内變有らん。因り而して之に乗り、戦わずして擒とす可き也。要は功を成すに在り、何ぞ必ずしも速やかなるを務めん！今諸道の徵兵は尚ほ多く未だ集まらず、請う且く之を待つべし。」

郭子儀、李光弼も亦た上言す、

「請う兵を引いて北に范陽(范阻×)を取り、其の巢穴を覆し、賊黨の妻子を質とし以て之を招かん、賊は必ず内に潰えん。潼關の大軍は、帷だ應に固守して以て之を弊らすべし、輕々しく出る可からず。」

國忠は翰が己を謀るを疑い、上に言う、以て、

「賊は方に備え無し、而るに翰は逗留し、將に機會を失わんとす。」

上は以て然りと為し、續いで中使を遣わして之を趣し、項背相い望む。翰は已むを得ず、膺を撫でて慟哭す。丙戌(22)、兵を引いて關を出る。

■**[哥舒翰は靈寶で崔乾祐に大敗北]** 己丑(25)、崔乾祐之軍に靈寶(改名するは215 卷天寶元年にあり、現・河南省三门峡市靈宝市)の西原に遇う。乾祐は險に據り以て之を待ち、南は山に薄り、北は河に阻まれ、隘道は七十里。庚寅(26)、官軍は乾祐と會戦す。乾祐は兵を險に伏せ、翰は田良丘と舟を中流に浮かべて以て軍勢を觀、乾祐の兵少なきを見、諸軍を趣して進ま使む。王思禮等は精兵五萬を將いて前に居り、龐忠等は餘兵十萬を將いて之に繼ぎ、翰は兵三萬を以て河北の阜に登りて之を望み、鳴鼓して以て其の勢いを助ける。乾祐が出す所の兵は萬人に過ぎず、什什伍伍、散じて列星の如く、或いは疏に或いは密に、或いは前み或いは卻き、官軍は望み而して之を笑う。乾祐は精兵を嚴し、其の後に陳ず。兵は既に交わり、賊は旗を偃せ遁げんと欲する者の如し、官軍は懈り、備えを為さず。須臾にして、伏兵は發し、賊は高きに乗りて木石を下し、撃ちて士卒を殺すこと甚だ衆し。道は隘くして、士卒は束ねるがごとく、槍槩は用いるを得ず。翰は氈車(毛氈の車)を以て馬に駕し前驅を為し、以て賊を冲(続は衝)かんと欲す。日中を過ぎ、東風は暴に急にして、乾祐は草車數十乗を以て氈車之前を塞ぎ、火を縦ちて之を焚き、煙焰の被う所、官軍は目を開く能わず、妄りに自ら相い殺し、賊が煙中に在りと謂い、弓弩を聚め而して之を射る。日暮れ、矢は盡き、乃ち賊無きを知る。乾祐は同羅の精騎を遣わして南山より過ぎ、官軍之後に出でて之を撃つ、官軍の首尾は駭亂し、備える所を知らず、是に於いて大敗す。或は甲を棄て山谷に竄匿し、(12-270p)或は相い擠排して河に入りて溺死す、鼙聲(かまびすしい声)は天地を振り、賊は勝ちに乗りて之に蹙る。後軍は前軍の敗れるを見、皆な自潰し、河北の軍(哥舒翰の軍)は之を望みて亦た潰え、瞬息の間、兩岸は皆な空となる(続は欠如)。翰は獨り麾下百餘騎と走り、首陽山(當に首山なるべし。蒲州河東県の界にあり。湖城県の荆山と河を隔てて相對す)より西に河を渡りて關に入る。關外に先ず三塹を為り、皆な廣さ二丈、深さ丈、人馬は其の中に墜ち、須臾にし而して滿つ。餘衆は之を踐みて以て度り、士卒の關に入るを得る者は才に八千餘人。辛卯(27)、乾祐は進みて潼關を攻め、之に克つ。

■**[哥舒翰は洛陽に送られる]** 翰は關西驛に至り、榜を掲げて散卒を収め、復た潼關を守らんと欲す。蕃將の火拔歸仁等は百餘騎を以て驛を圍み、入りて翰に謂って曰く、

「賊は至る矣、請う公は馬に上れ。」

翰は馬に上りて驛を出、歸仁は衆を帥いて叩頭して曰く、

「公は二十萬の衆を以て一戦し之を棄てる、何の面目ありてか復た天子を見るや！且つ公は高仙芝(前卷前年にあり、郡は敗れ必ず誅せられるを謂う)、封常清を見ざる乎？請う公は東に行くべし。」

翰は可かず、馬を下りんと欲す。歸仁は毛を以て其の足を馬腹に靡ぎ、及び諸將の従わざる者は、皆な之を執りて以て東す。會々賊將の田乾真は已に至り、遂に之に降り、俱に洛陽に送られる。安祿山は翰に問いて曰く、

「汝は常に我を輕んじる(216 卷天寶十一載にあり)、今定めて何如？」

翰は地に伏して對えて曰く、

「臣の肉眼は聖人を識らず。今天下は未だ平らかず、李光弼は常山に在り、李祗(吳王)は東平に在り、魯炅は南陽に在り、陛下(安祿山)は臣を留めて、尺書を以て之を招か使めば、日ならずして皆な下る矣。」

祿山は大いに喜び、翰を以て司空、同平章事と為す。火拔歸仁に謂って曰く、

「汝は主に叛く、不忠不義なり。」

執り而して之を斬る。翰は書を以て諸將を招き、皆た復書して之を責める。祿山は效無きを知り、乃ち諸を苑中(東都)に囚う。潼關は既に敗れ、是に於いて河東(蒲州)、華陰(華州)、馮翊(同州)、上洛(商州)の防禦使は皆な郡を棄てて走り、所在の守兵は皆な散ず。

【長安の危機、玄宗は蜀へ逃亡】

■【楊国忠は蜀逃亡を提案】是の日、翰の麾下は來たりて急を告げ、上は時に召見せず、但だ李福德等を遣わして監牧兵を將いて潼關に赴かしむ。暮に及び、平安火(唐の鎮戍烽火候の至る所、大率相い去ること三十里、毎日初夜、煙一炬を放つ。之を平安火と謂う。時に守兵已に潰え、人の復火を挙げる無し)に至らず、上は始めて懼れる。壬辰(28)、宰相を召して之を謀る。楊國忠は自ら身を以て劍南を領し、安祿山の反するを聞き、即ち副使の崔圓をして陰に儲侍を具し、急有れば之を投じるに備え令む、是に至りて首として蜀に幸する之策を唱える。上は之を然りとす。癸巳(29)、國忠は百官を朝堂に集め、惶惶惶急なり、慌てるし流涕す。問うに策略を以てし、皆な唯唯として對えず。國忠は曰く、

「人は告ぐ祿山の反状は已に十年、上下は之を信ず。今日之事は、宰相之過に非ず。」

仗下り(朝罷むときは、左右三衛の立仗するもの皆仗下す)、士民は掠擾(統は驚擾)して奔走し、之く所を知らず、市裡は蕭條たり。國忠は韓、馮をして宮に入り、上に蜀に入るを勧め使む。

■【玄宗は親征と称して長安から逃亡】甲午(30)、百官の朝する者は什に一二も無し。上は勤政樓に御し、制を下し、雲う、

「親征せんと欲す」(12-271p)

と、聞く者は皆な之を信じる莫し。京兆尹の魏方進を以て御史大夫兼置頓使と為す。京兆少尹の靈昌の崔光遠を京兆尹と為し、西京留守に充てる。將軍の邊令誠は宮闈管鑰を掌る。托するに劍南節度大使の穎王の[激の王偏の字]が將に鎮に赴くを以てし、本道に令して儲侍を設けしむ。是の日、上は仗を北内(唐は長安に都し、大極宮を以て西内と為し、火明宮を東内と為し、興慶宮を南内と為し、北内は當に玄武門内に在るべし。又、地望を以て之を言うときは、興慶宮より仗を映して大明宮に帰るなり。興慶宮は南に在り、大明宮は北に在り、故に亦た大明宮を謂ってきたうちと為すなるべし)に移す。既に夕べとなり、龍武大將軍の陳玄禮に命じて六軍を整比せしめ、厚く錢帛を賜わり、閒廄の馬九百餘匹を選ばしめ、外人は皆な之を知る莫し。乙未(31)、黎明、上は獨り貴妃姊妹、皇子、妃、主、皇孫、楊國忠、韋見素、魏方進、陳玄禮及び親近の宦官、宮人と延秋門(長安禁苑西門)を出で、妃、主、皇孫之外に在る者は、皆な之を委て而して去る。上は左藏を過ぎ、楊國忠は之を焚くを請い、曰く、

「賊の為に守る無からん。」

上は愀然として曰く、

「賊は來るとも得ざれば、必ず更に百姓に斂せん。之を與えるに如かず、重ねて吾が赤子を困しめる無からん。」(玄宗は人に君たるの言有り)

■【長安の大混乱】是の日、百官は猶ほ入朝する者有り、宮門に至り、猶ほ漏聲(漏刻の音)を聞き、三衛の立仗は儼然とす。門は既に啟き、則ち宮人は亂り出で、中外は擾攘し、上の之く所を知らず。是に於いて王公、士民は四出逃竄し、山谷の細民は争いて宮禁及び王公の第捨に入り、金寶を盗み取り、或は驢に乗り殿に上る。又た左藏の大盈庫を焚く。崔光遠、邊令誠は人を帥いて火を救い、又た人を募りて府、縣官を攝し分けて之を守り、十餘人を殺し、乃ち稍定まる。光遠は其の子を遣わして東に祿山を見、令誠も亦た管鑰を以て之に獻ず。

■【逃亡して寢食にも困る】上は便橋を過ぎ、楊國忠は人をして橋を焚か使む。上は曰く、

「士庶は各々賊を避きて生を求める、奈何して其の路を絶つや！」

内侍監(玄宗は始めて置く、秩三品、高力士と袁思藝)の**高力士**を留めて、撲滅して乃ち來たら使む。上は宦者の**王洛卿**を遣わして前行し、郡縣に置頓せんことを告諭す。食する時、咸陽(秦の始皇帝の都)の望賢宮(咸陽県の東)に至り、**洛卿**は縣令と俱に逃げ、中使は吏民を徵召して應ずる者有る莫し。日中するに尙々とし、上は猶ほ未だ食せず、**楊國忠**は自ら胡餅(蒸餅、胡麻を以て之に付ける)を市^かいて以て獻ず。是に於いて民は争いて糲(玄米)飯を獻じ、雜じるに麥豆を以てす。皇孫の輩は争いて手を以て掬して之を食し、須臾にし而して盡き、猶ほ未だ飽く能わず。上は皆な其の直を酬い、之を慰勞す。衆は皆な哭し、上は亦た泣を掩う。老父の**郭從謹**という有り、進言して曰く、

「**祿山**は禍心を包藏すること、固より一日に非ず。亦た闕に詣りて其の謀を告げる者有り(前年にあり)、**陛下**は往往にして之を誅し、其の奸逆を逞しくするを得使む、**陛下**の播越(遠方に彷徨う)を致せり。是を以て先王は務めて忠良を延訪し以て聰明を廣くす、蓋し此が為也。臣は猶ほ記す**宋璟**が相と為り、數々直言を進め、天下は頼りて以て安平なり。頃より以來、在廷之臣は言を以て諱と為し、惟だ阿諛して(12-272p)容れられることを取り、是を以て闕門之外は、**陛下**は皆な得而して知らず。草野之臣は、必ず今日有るを知る事久し矣、但だ九重嚴邃(厳しく深くして入り難し)にして、區區之心は、上達の路無し。事此に至らざれば、臣は何に由りてか**陛下**之面を睹而して之を訴えるを得ん乎！」

上は曰く、

「此れ朕之不明、悔いるに及ぶ所無し！」

慰諭し而して之を遣る。俄に而して尚食(御膳を主る)は御膳を擧げて以て至り、上は命じて先ず從官に賜わり、然る後に之を食す。軍士に命じて散りて村落に詣りて食を求めしめ、未時を期し皆な集まり而して行く。夜將に半ばならんとし、乃ち金城(京兆始平県)に至る。縣令は亦た逃げ、縣民は皆な身を脱して走り、飲食器皿は具に在り、士卒は以て自給するを得る。時に從者は多く逃げ、内侍監の**袁思藝**も亦た亡げ去り、驛中に燈無く、人は相い枕藉し而して寝ね、貴賤無く以て復た辨ずる無(分×)し。王思禮は潼關より至り、始めて**哥舒翰**が擒とせらるを知る。思禮を以て河西、隴右節度使と為し、即ち鎮に赴か令め、散卒を收合し、以て東討するを俟たしむ。

【馬嵬驛で楊貴妃を縊り殺す】

■[楊国忠の惨殺と楊貴妃の縊殺] 丙申(32)、馬嵬驛(京兆興平県にあり、現・咸陽市興平市)に至り、將士は饑え疲れ、皆な憤怒す。**陳玄禮**は禍いは**楊國忠**に由るを以て、之を誅せんと欲し、東宮の宦者の李輔國に因り以て太子に告げ、太子は未だ決せず。會々吐蕃の使者二十餘人は**國忠**の馬を遮り、訴えるに食無きを以てし、**國忠**は未だ對えるに及ばず、軍士は呼びて曰く、

「**國忠**は胡虜と反を謀る！」

或は之を射、鞍に中てる。**國忠**は走りて西門内に至り、軍士は追いて之を殺し、支體を屠割し、槍を以て其の首を驛門外に掲げ、並せて其の子の戸部侍郎の**暄**及び**韓國**、**秦國夫人**を殺す。御史大夫の**魏方進**は曰く、

「汝の曹は何ぞ敢えて宰相を害するや！」

衆は又た之を殺す。**韋見素**は亂を聞き而して出で、亂兵の搦^うつ所と為り、腦血地に流れる。衆は曰く、「**韋相公**を傷つける勿れ。」

之を救い、免かるるを得る。軍士は驛を圍み、上は喧嘩を聞き、問う、

「外は何事ぞや」

と、左右は**國忠**が反するを以て對える。上は杖履して驛の門を出で、軍士を慰勞し、隊を収め令め、軍士は應じず。上は**高力士**をして之を問わ使め、**玄禮**は對えて曰く、

「**國忠**は反を謀る、**貴妃**は宜しく供奉すべからず、願わくは**陛下**は恩を割きて法を正すべし。」

上は曰く、

「**朕**は當に自ら之を處す。」

と、門に入る、杖に倚り首を傾け而して立つ。之久しく、京兆司録(京兆の司録參軍は正七品上。武徳の初め、州主簿を改めて録事參軍と曰う。違失を正し符印に洩むを掌る。開元元年改めて司録と曰う)の**韋諤**は前みて言つて曰く、

「今衆怒犯し難し(左傳の鄭の子産の言を引く)、安危は晷刻(きこく)に在り、願わくは**陛下**は速かに決すべし！」
因りて叩頭して流血す。上は曰く、

「**貴妃**は常に深宮に居り、安んぞ**國忠**の反を謀るを知らん！」

高力士は曰く、

「**貴妃**は誠に罪無し、然れども將士は已に**國忠**を殺し、而も**貴妃**は**陛下**の左右に在り、豈に敢えて自ら安んぜんや！願わくは**陛下**は審かに之を思うべし、將士安ければ、則ち**陛下**は安し矣。」

上は乃ち**力士**に命じて**貴妃**を佛堂に引き、之を縊殺せしむ。屍を輿して驛庭に置き、**玄禮**等を召し入りて之を視しむ。**玄禮**等は乃ち冑を免ぎ甲を釋き、頓首して罪を請い、上は之を慰勞し、軍士を曉諭せ令む。**玄禮**等は萬歳と呼び、再拜し而して出で、是に於いて(12-273p)始めて部伍を整え行計を為す。**諤**は、見素之子也。**國忠**の妻の**裴柔**(もと蜀の倡なり)は其の幼子の**晞**及び**虢國夫人**、夫人の子の**裴徽**と皆な走り、陳倉に至り、縣令の**薛景仙**は吏士を帥いて追捕し、之を誅す。

【皇太子は靈武へ】

■**[衆は太子が蜀に入るを求めず]**丁酉(33)、上は將に馬嵬を發せんとし、朝臣は惟だ**韋見素**一人のみ、乃ち**韋諤**を以て御史中丞と為し、置頓使に充てる。將士は皆な曰く、

「**國忠**は反を謀り、其の將吏は皆な蜀に在り、往く可からず。」

或は河、隴に之くを請い、或は靈武に之くを請い、或は太原に之くを請い、或は京師に還るを言う。上の意は蜀に入るに在り、衆の心に違うを慮り、竟に向かう所を言わず。**韋諤**は曰く、

「京に還るは、當に賊を御ぐ之備え有るべし。今兵少なく、未だ東に向かうは易からず、如かず且く扶風に至り、徐に去就を圖るべし。」

上は衆に詢り(はか)、衆は以て然りと為し、乃ち之に従う。行くに及び、父老は皆な道を遮り留まらんことを請い、曰く、

「宮闕は、**陛下**の家居、陵寢は、**陛下**の墳墓なり、今此を捨てて、何くに之かんと欲するや？」

上は之が為に轡を按ずること之久しく、乃ち太子をして後に於いて父老を宣慰せしむ。父老は因りて曰く、

「**至尊**は既に肯えて留まらず、それがし某等は願わくは子弟を帥いて**殿下**に従い東に賊を破り、長安を取らん。若し**殿下**が**至尊**と皆な蜀に入れば、中原の百姓は誰か之が主為ら使めん？」

須臾にして、衆は數千人に至る。太子は可(き)かず、曰く、

「**至尊**は遠く險阻を冒し、吾は豈に朝夕も左右を離れるを忍びんや。且つ吾は尚ほ未だ面辭せず、當に還りて**至尊**に白し、更に進止を稟く。」

涕泣し、馬を跋して(馬を勒して回転せしむ)西せんと欲す。建寧王の**倓**は**李輔國**と**韞**^{おもがい}を執りて諫めて曰く、「逆胡は闕を犯し、四海は分け崩れ、人情に因らざれば、何を以て興復するや！今殿下は**至尊**に従いて蜀に入り、若し賊兵が棧道を燒絶すれば、則ち中原之地は手を拱いて賊に授けん矣。人情は既に離れ、復た合う可からず、復た此くに至らんと欲すると雖も、其の得可けん乎！如かず西北の守邊之兵を収め、**郭**、**李**を河北より召し、之と力を並せて東に逆賊を討ち、二京(続は兩京)を克復し、四海を削平し、社稷をして危うく而して復た安く、宗廟をして毀れ而して更に存せしめ、宮禁を掃除し以て**至尊**を迎えん、豈に孝之大なる者に非ず乎！何ぞ必ずしも區區たる温清(温情×、記に曰く、凡そ人の子と為りては、冬は暖かく夏は清しくす)、兒女之戀を為さん乎！」

廣平王の**俶**も亦た太子の留まるを勸む。父老は共に太子の馬を擁し、行くを得ず。太子は乃ち**俶**をして馳せて上に白さしむ。上は轡を總りて太子を待ち、久しく至らず、人をして之を偵せしめ、還りて狀を白し、上は曰く、

「天也！」

乃ち命じて後軍二千人及び飛龍殿馬(仗内六厩、飛龍殿を最上の乗馬し為す)を分けて太子に従わしめ、且つ將士を諭して曰く、

「太子は仁孝なり、宗廟を奉ず可し、汝の曹は善く之を輔佐すべし。」

又た太子を諭して曰く、

「汝は之を勉めよ、吾を以て念を為す勿れ。西北の諸胡は、吾は之を撫すこと素より厚く、汝は必ず其の用を得ん。」

太子は南に向かいて(玄宗は既に南にゆく)號泣し而して已む。又た東宮の内人(張良娣は軍中に在り、これより建寧の禍を構える、張良娣は肅宗の皇后になる、唐朝で最後に権力を持った皇后)を太子に送らしめ、且ち旨を宣し位を太子に傳えんと欲す、受けず。**俶**、**倓**は、皆な太子之子也。(12-274p)

■[皇帝の言で流言終息]己亥(35)、上は岐山(扶風郡西北、陝西省關中道岐山県、現・宝鸡市岐山県)に至る。或は言う、

「賊の前鋒が且に至らんとす」

と、上は遽に過ぎ、扶風郡(現・宝鸡市扶風県)に宿す。士卒は潜に去就を懷き、往往にして流言して不遜なり、**陳玄禮**は制する能わず、上は之を患う。會々成都は春彩十餘萬匹を貢ぎ、扶風に至り、上は命じて悉く之を庭に陳じしめ、將士を召して入らしめ、軒に臨みて之を諭して曰く、

「朕は比來衰耄す、托任人を失い、逆胡常を亂すを致し、須く遠く其の鋒を避くべし。知る卿等は皆な蒼猝に朕に従い、父母妻子に別れるを得ず、芟(草行)涉(水行)して此に至るは、勞苦至れり矣、朕は甚だ之を愧じる。蜀の路は阻長(險阻で遠い)にして、郡縣は褊小なり、人馬衆多く、或は供する能わず、今卿等は各々家に還るを聽す、朕は獨り子、孫、中官と前み行きて蜀に入らん、亦た自ら達するに足らん。今日卿等と訣別し、共に此の彩を分け、以て資糧に備える可し。若し歸れば、父母及び長安の父老を見れば、朕が為に致意を致せ、各々好く自愛せよ也！」

因りて泣下り襟を沾す。衆は皆な哭し、曰く、

「臣等の死生は陛下に従う、敢えて貳有らず。」

上は良く久しく曰く、

「去留は卿に聽す。」

是より流言は始めて息む。

■[太子は朔方方面に向かう]太子は既に留まり、未だ適く所を知らず。廣平王の倓は曰く、「日漸く晏れる、此には駐まる可からず、衆は何くに之かんと欲すや？」

皆な對える莫し。建寧王の倓は曰く、

「殿下は昔嘗て朔方節度(213 卷開元十五年にあり)と為り、將吏は歲時に啟を致す、倓は略ぼ其の姓名を識る。今河西、隴右之衆は皆な敗れて賊に降り、父兄子弟は多く賊中に在り、或は異圖を生じん。朔方道は近く、士馬は全盛なり、裴冕(時に河西の行軍司馬)は衣冠の名族なり、必ず貳心無し。賊は長安に入りて方に虜掠し、未だ地を徇えるに暇あらず、此に乗じて速かに往きて之に就き、徐に大舉を圖るは、此れ上策也。」衆は皆な曰く、

「善し！」

と、渭濱に至り、潼關の敗卒に遇い、誤りて之と戦い、死傷は甚だ衆し。已にして、乃ち餘卒を収め、渭水の淺き處を擇び、乘馬して涉渡す。馬無き者は涕泣し而して返す。太子は奉天(文明元年に京兆の醴泉・始平・好時・武功・邠州の永寿县を分けて奉天県を置き以て乾陵に奉ず)より北上し、新平(邠州、現・咸陽市彬縣)に至る比、^{まで}通夜馳せること三百餘里、士卒、器械は失亡すること過半なり、存する所の之衆は數百に過ぎず。新平太守の薛羽は郡を棄てて走り、太子は之を斬り、是の日、安定(現・甘肅省定西市安定区)に至り、太守の徐穀も亦た走り、又た之を斬る。

■[玄宗は陳倉に到達]庚子(36)、劍南節度留後の崔圓を以て劍南節度等副大使と為す。辛丑(37)、上は扶風を發し、陳倉(現・寶鶏市陳倉区)に宿す。

■[太子は平涼で兵力増強]太子は烏氏(漢の県、現・甘肅省平涼市涇川県)に至り、彭原太守の李遵は出で迎え、衣及び糗糧を獻ず。彭原(寧州、元北地郡、天寶元年に郡名を改める。現・甘肅省慶陽市西峰区彭原鎮)に至り、士を募り、數百人を得る。是の日、平涼(原州、現・甘肅省平涼市崆峒区)に至り、監牧馬を閱し、數萬匹を得、又た士を募り、五百餘人を得、軍勢は稍振う。(12-275p)

■[蜀は豊稔・甲兵全盛]壬寅(38)、上は散關(寶鶏西南の大散嶺の上の関所、大散關、現・寶鶏市陳倉渭浜区)に至り、扈從の將士を分けて六軍と為し、穎王の[王偏の激]をして先行して劍南に詣ら使む。壽王の瑁等は分けて六軍を將いて以て之に次ぐ。丙午(42)、上は河池郡(鳳州)に至る。崔圓は奉表して車駕を迎え、具に蜀土の豊稔にして、甲兵の全盛なるを陳ず。上は大いに悦び、即日、圓を以て中書侍郎、同平章事と為し、蜀郡の長史は故の如し。隴西公の瑒を以て漢中王、梁州都督、山南西道採訪防禦使と為す。瑒は、璡之弟也。

■[河西の諸胡を鎮撫]王思禮は平涼に至り、河西の諸胡の亂れるを聞き、還り、行在に詣る。初め、河西の諸胡の部落は其の都護が皆な哥舒翰に従いて潼關に没すと聞き、故に争いて自立し、相い攻撃す。而るに都護は實は翰に従いて北岸に在りて、死なず、又た火拔歸仁と俱に賊に降らず。上は乃ち河西の兵馬使の周泌を以て河西節度使と為し、隴右兵馬使の彭元耀を隴右節度使と為し、都護の思結進明等と俱に鎮に之き、其の部落を招か使む。思禮を以て行在都知兵馬使と為す。

■[扶風の制圧]戊申(44)、扶風の民の康景龍等は自ら相い帥いて賊の署する所の宣慰使の薛總を撃ち、斬首は二百餘級。庚戌(46)、陳倉令の薛景仙は賊の守將を殺し、扶風に克ち而して之を守る。

■[安祿山軍に計略なく、玄宗太子は逃亡成功]安祿山は上が遽に西に幸すを意わず、遣使して崔乾祐の兵を止め、潼關に留めること凡そ十日、乃ち孫孝哲を遣わして兵を將いて長安に入らしめ、張通儒を以て西京留守と為し、崔光遠を京兆尹と為す。安忠順をして兵を將いて(長安の)苑中に屯し、以て關中を鎮ぜ使む。孝哲は祿山の寵任する所と為り、尤も事を用い、常に嚴莊と權を争う。祿山は關中の諸將を監ぜ使め、通儒等は皆な制を孝哲に受ける。孝哲(教哲×)は豪侈にして、殺戮に果に、賊黨は之を畏れる。祿山

は命じて百官、宦者、宮女等を搜捕せしめ、數百人を獲る毎に、輒ち兵を以て洛陽に衛送す。王、侯、將、相は(玄宗)の車駕に扈從し、家長安に留まる者は、誅は嬰孩に及ぶ。**陳希烈**は晚節に恩(相の職)を失うを以て、上を怨み、**張均**、**張垚**等(大いに用いられざる)と皆な賊に降る。**祿山**は**希烈**、**垚**を以て相と為し、自餘の朝士は皆な授けるに官を以てす。是に於いて賊勢は大いに熾んなり、西は汧、隴を脅し(扶風を得る)、南は江、漢を侵し(南陽を得る)、北は河東之半(潼關の北)を割く。然るに賊將は皆な粗猛にして遠略無く、既に長安に克ち、自ら以て志を得たりと為し、日夜酒を縦にし、専ら聲色寶賄を以て事と為し、復た西出之意無く、故に上は安行して蜀に入るを得、太子は北行し亦た追迫之患無し。

■**李光弼**は博陵を圍んで未だ下らず、潼關の守られざるを聞き、圍みを解いて而して南す。**史思明**は其の後を踵み、**光弼**は撃ちて之を卻け、**郭子儀**と皆な兵を引いて井陘に入り、常山太守の**王輔**を留めて景城、河間の團練兵を將いて常山を守らしむ。平盧節度使の**劉正臣**は將に范陽を襲わんとし、未だ至らず、(12-276p) **史思明**は兵を引いて之を逆撃し、**正臣**は大敗し、妻子を棄てて走り、士卒の死者は七千餘人。初め、**顏真卿**は河北節度使の**李光弼**が井陘を出るを聞き、即ち軍を斂めて平原に還り、以て**光弼**之命を待つ。**郭**、**李**が西に井陘に入るを聞き、**真卿**は始めて復た河北軍事を區處す。

【皇太子即位、靈武に肅宗】

■**[平涼から靈武へ]**太子は平涼に至ること數日、朔方留後の**杜鴻漸**、六城(朔方の統べる所に三受降城及び豊安・定遠・振武の六城あり。皆な黄河の外に在り)水陸運使の**魏少游**、節度判官の**崔漪**、支度判官の**盧簡金**、鹽池(靈鹽二州に皆鹽池あり)判官の**李涵**は相い與に謀りて曰く、

「平涼は散地なり、屯兵之所に非ず、靈武(靈州、朔方節度使の治所、現・寧夏回族自治区吳忠市古城鎮)は兵食完富なり、若し太子を迎えて此に至れば、北に諸城の兵を収め、西に河、隴の勁騎を發し、南に向かいて以て中原を定めん、此れ萬世一時也。」

乃ち**涵**をして箋を太子に奉らせ、且つ朔方の士馬、甲兵、谷帛、軍須之數を籍し以て之を獻ぜしむ。**涵**は平涼に至り、太子は大いに悦ぶ。會々河西司馬の**裴冕**は入りて御史中丞と為り、平涼に至りて太子に見え、亦た太子は朔方に之かんと勧め、太子は之に従う。**鴻漸**は、**暹**(開元中に相と為る)之族子。**涵**は、**道**(永安公主孝基の兄の子、孝基の後を嗣ぐ)之曾孫也。**鴻漸**、**漪**は**少游**をして後に居り、次捨を葺め、資儲を庀(そな、具)え使め、自ら太子を平涼の北境に迎え、太子を説いて曰く、

「朔方は、天下の勁兵の處也。今吐蕃は和を請い、回紇は内附し、四方の郡縣は大抵は堅守して賊を拒み以て興復を俟つ。**殿下**は今兵を靈武に理め、轡を按じて長驅し、檄を四方に移し、忠義を收攬し、則ち逆賊を屠るに足らざる也。」

少游は盛んに宮室、帷帳を治め皆な禁中に仿い、飲膳は水陸(水陸の食料)を備える。秋、七月、辛酉(57)、太子は靈武に至り、悉く命じて之を撤せしむ。

■**[房琯を相と為す]**甲子(0)、上は普安(劍州)に至り、憲部侍郎の**房琯**は來たりて謁見す。上之長安を發する也、群臣は多く知らず、咸陽に至り、**高力士**に謂って曰く、

「朝臣は誰か當に來たるべき、誰か來たらざるべきや？」

對えて曰く、

「**張均**、**張垚**の父子は陛下の恩を承けること最も深く、且つ戚裡(公主の尚すこと)に連なり、是れ必ず先ず來たらん。時論は皆な謂う、

「**房琯**は宜しく相と為るべし」

と、而るに陛下は用いず、又た祿山は嘗て之を薦め、恐らくは或は來たらざらん。」

上は曰く、

「事は未だ知る可からず。」

瑄が至るに及び、上は均兄弟に問う、對えて曰く、

「臣は帥いて與偕に來たるも、逗留して進まず。其の意を觀るに、蓄える所有るに似たり而も言う能わざる也。」

上は力士を顧みて曰く、

「朕は固より之を知る矣。」

即日、瑄を以て文部侍郎、同平章事と為す。

■[張垺を相に用いず]初め、張垺(ちょうぎ)は寧親公主(興信より徙し封じらる、上の女)に尚し、禁中に於いて宅を置くを聽され、寵渥は比無し。陳希烈は政務を解くを求め、上は垺の宅に幸し、相と為す可き者を問う。

垺は未だ對えず。上は曰く、

「愛婿に若くは無し。」

垺は階を降りて拜舞す。既に而して用いず、故に垺は怏怏を懷き、上も亦た之を覺る。是の時均、垺兄弟及び姚崇之子の尚書右丞の奕、蕭嵩之子の兵部侍郎の華、韋安石之子の禮部侍郎の陟、(12-277p)太常少卿の斌は、皆な才望を以て大官に至り、上は嘗て曰く、

「吾(或×)は相を命じるに、當に遍く故の相の子弟を擧げる耳。」

既に而して皆な用いず。

■[肅宗は靈武にて即位]裴冕、杜鴻漸等は太子に箋を上り、馬嵬之命に遵いて、皇帝に即位するを請い、太子は許さず。冕等は言つて曰く、

「將士は皆な關中人なり、日夜歸るを思う、崎嶇(艱難なる貌)として殿下に従い遠く沙塞を渉る所以の者は、尺寸之功を冀うなり。若し一朝離散すれば、復た集まる可からず。願わくは殿下は勉めて衆心に徇い、社稷の計を為すべし！」

箋は五たび上り、太子は乃ち之を許す。是の日、肅宗は靈武城の南樓に於いて即位し、群臣は舞蹈し、上(これ以後上とは肅宗)は流涕して歔歔す。玄宗を尊びて上皇天帝と曰い、天下に赦し、改元す(至徳元載)。杜鴻漸、崔漪を以て並びて中書舍人の事を知たらしめ、裴冕を中書侍郎、同平章事と為す。關内採訪使(京官を以て領し、治所無し。今改めて節鎮と為し、安化に治し、京兆・同・岐・金・商の五州を領す)を改めて節度使と為し、徒して安化(甘肅省涇原道廣陽県の北二十里、現・甘肅省慶陽市華池県西華池鎮)に治し、前蒲關防禦使の呂崇賁を以て之と為す。陳倉令の薛景仙を以て扶風太守と為し、防禦使を兼ねしむ。隴右節度使を郭英乂を天水太守と為し、防禦使を兼ねしむ。時に塞上の精兵は皆な選ばれて入りて賊を討ち、惟だ老弱を餘して邊を守り、文武の官は三十人に滿たず、草萊を披き、朝廷を立て、制度草創にして、武人は驕慢なり。大將管の崇嗣は朝堂に在り、闕を背にし而して坐し、言笑自若たり、監察御史の李勉は奏して之を彈じ、有司に繋ぐ。上は特に之を原し、歎じて曰く、

「吾に李勉有り、朝廷は始めて尊し！」

勉は、元懿(高祖の子)之曾孫也。旬日の間、歸附する者は漸く衆し。

■[張良娣は帝を守る]張良娣(秩正三品)は性は巧慧にして、能く上の意を得、上に従いて朔方に來たり。時に從兵は單寡なり、良娣は寝ねる毎に、常に上の前に居る。上は曰く、

「寇を禦ぐは婦人の能くする所に非ず。」

良娣は曰く、

「蒼猝之際、妾は身を以て之に當たらん、殿下は後ろより逸れ去る可し。」

靈武に至りて、子を産む。三日にして起き、戰士の衣を縫う。上は之を止めて、對えて曰く、

「此れ妾が自ら養う之時に非ず。」

上は是を以て益々之を憐む。

■【蜀からの制で玄宗の行方を知る】丁卯(3)、上皇(玄宗)は制す、(太子が即位するも、蜀の上皇は未だ知らず)

「太子の亨を以て天下兵馬元帥に充て、朔方、河東、河北、平盧節度都使を領し、南に長安、洛陽を取らん。御史中丞の裴冕を以て左庶子を兼ね、隴西(渭州)郡司馬の劉秩(房瑄の推薦)を右庶子を試守せしむ。永王の璘を山南東道、嶺南、黔中、江南西道節度都使に充て、少府監の竇紹を以て之が傅と為し、長沙太守の李峴を都副大使(諸道の節度使に諸王を任命して都使と為し、鎮に赴かざる時に都副大使が摂統す)と為す。盛王の琦を廣陵大都督に充て、江南東路及淮南、河南等路節度都使を領せしめ、前江陵都督府長史の劉匯(統は劉彙)を以て之が傅と為し、廣陵郡(揚州)長史の李成式を都副大使と為す。豐王の珙を武威都督に充て、仍ほ河西、隴右、安西、北庭等路節度都使を領せしめ、(12-278p)隴西太守の濟陰の鄧景山を之が傅と為し、都副大使に充てる。應に須^{もち}いるべき士馬、甲仗、糧賜等は、並びに當路に於いて自ら供せしむ。其の諸路の本節度使の號王の巨等は並びに前に依りて使に充てる。其の官屬及び本路の郡縣の官を署置するは、並びに自ら簡擇するに任せ、署し訖りて聞奏せしむ。」

時の琦、珙は皆な閣を出です、惟だ璘は鎮に赴き領せしむ。山南東道節度を置き、襄陽等九郡(襄州襄陽郡、鄧州南陽郡、隨州漢東郡、唐州淮安郡、均州武當郡、房州房陵郡、金州安康郡、商州上洛郡)を領す。五府經略使を升せて嶺南節度と為し、南海等二十二郡を領す。五溪經略使を升せて黔中節度と為し、黔中等諸郡を領す。江南を分けて東、西二道と為し、東道は餘杭(杭州、現・浙江省杭州市余杭区)を領し、西道は豫章(現・九江市湖口県彭澤県等)等の諸郡を領す。是より先四方は潼關が守りを失うを聞き、上が之く所を知る莫し、是の制下るに及び、始めて乘輿の所在を知る。匯は、秩之弟也。

【安祿山の長安占領、肅宗の靈武集結】

■【安慶宗殺害の仕返し】安祿山は孫孝哲をして霍國長公主(睿宗の女、裴虛己に下嫁す)及び王妃、附馬等を崇仁坊に殺し、其の心を剝りて、以て安慶宗(安祿山の息子は前卷前年に殺される仕返し)を祭ら使む。凡そ楊國忠、高力士之黨及び祿山が素より惡む所の者は皆な之を殺すこと、凡そ八十三人、或は鐵楯を以て其の腦蓋を掲げ、流血は街に滿つ。己巳(5)、又た皇孫及び郡、縣主二十餘人を殺す。

■庚午(6)、上皇は巴西(隆州巴西郡、先天二年に上皇の諱を避けて名を閬州と更む。天寶元年に名を閬中郡と更め、綿州金山郡を更めて巴西と曰う)に至る。太守の崔渙は迎えて謁す。上皇は與に語り、之を悦び、房瑄は復た之を薦し、即日、門下侍郎、同平章事に拜し、韋見素を以て左相と為す。渙は、玄暉(中宗の復辟するや、崔玄暉の功、五王に列す)之孫也。

■【李泌は右相と為らず】初め、京兆の李泌は、幼くして才敏を以て著聞し、玄宗は忠王と與に遊ば使む。忠王は太子と為り、泌は已に長じ、上書して事を言う。玄宗は之を官にせんと欲するも、可かず。太子と布衣の交わりを為さ使め、太子は常に之を先生と謂う。楊國忠は之を惡み、奏して蘄春(蘄州、現・黃岡市蘄水県)に徙し、後に歸るを得、潁陽(河南省河洛道登封県、現・鄭州市登封市)に隱居す。上(肅宗)は馬嵬より北行し、遣使して之を召し、靈武に謁見し、上は大いに喜び、出でて則ち轡を聯ね、寢ねれば則ち榻を對し、太子為る時の如く、事は大小と無く皆な之を咨り、言従わざるは無く、將相の進退に至るまで亦た與に之を議

す。上は**泌**を以て右相と為さんと欲し、**泌**は固辭して曰く、

「陛下は待つに賓友を以てす、則ち宰相よりも貴し矣、何ぞ必ずしも其の志を屈せん！」

上は乃ち止む。

■**[同羅・突厥の宣慰]**同羅、突厥の**安祿山**に従いて反する者は長安の苑中に屯し、甲戌(10)、其の酋長の**阿史那從禮**は五千騎を帥いて、廐馬二千匹を竊み逃げて朔方に歸り、諸胡を邀結し、邊地を盜據せんと謀る。上は遣使して之を宣慰し、降る者は甚だ衆し。

■賊は兵を遣わして扶風を寇し、**薛景仙**は撃ちて之を卻ける。

■**安祿山**は其の將の**高嵩**を遣わして敕書、繪彩を以て河、隴の將士を誘わしむ、大震關使(隴州汧源縣の西隴山に在る)の**郭英乂**は擒えて之を斬る。(12-279p)

■**[官僚は次々と靈武に至る]**同羅、突厥之逃げ歸る也、長安は大いに擾れ、官吏竄匿し、獄囚は自ら出でる。京兆尹の**崔光遠**は以為らく、賊且に遁れんとす矣、吏卒を遣わして**孫孝哲**の宅を守らしむ。**孝哲**は狀を以て**祿山**に白し、**光遠**は乃ち長安令の**蘇震**と府、縣官十餘人を帥いて來奔す。己卯(15)、靈武に至り、上は**光遠**を以て御史大夫兼京兆尹と為し、渭北に之きて吏民を招集せ使む。**震**を以て中丞と為す。**震**は、**瑰**之孫也。**祿山**は**田乾真**を以て京兆尹と為す。侍御史の**呂譚**、右拾遺の**楊綰**、奉天令の安平の**崔器**は相繼いで靈武に詣る。**譚**、**器**を以て御史中丞と為し、**綰**を起居舍人、知制誥と為す。

■上は河西節度副使の**李嗣業**に命じて兵五千を將いて行在に赴き、**嗣業**は節度使の**梁宰**と謀り、且く師を緩めて以て變を觀る。綏德府の折衝の**段秀實**は**嗣業**を讓めて曰く、

「豈に君父の急を告げ、而して臣子は晏然として赴かざる者有らん乎！特進は常に自ら大丈夫と謂い、今日之を視るに、乃ち兒女子なる耳！」

嗣業は大いに慚じ、即ち宰に白し、數の如く兵を發し、**秀實**を以て自ら副とし、之を將いて行在に詣る。

上は又た安西に徵兵す。行軍司馬の**李棲筠**は精兵七千人を發し、勵ますに**忠義**を以て而して之を遣る。

■敕して扶風を改めて鳳翔郡と為す。

■庚辰(16)、上皇は成都に至り、從官及び六軍の至る者は千三百人而して已む。

【計略人望拔群の張巡】

■**[張巡は雍丘で大將六人を斬り團結]**令狐潮は張巡を雍丘に圍み、相い守ること四十餘日、朝廷の聲問は通じず。潮は玄宗が已に蜀に幸すを聞き、復た書を以て巡を招く。大將六人有り、官は皆な開府、特進なり、巡に白すに、

「兵勢は敵せず、且つ上の存亡は知る可からず、賊に降るに如かず。」

を以てす。巡は陽りて許諾す。明くる日、堂上に天子の畫像を設け、將士を帥いて之を朝し、人人は皆な泣く。巡は六將を前に引き、責めるに大義を以てし、之を斬る。士心は益々勸む。

■**[蒿人形で矢數十萬を得る]**城中(中城×)矢は盡き、巡は蒿を縛りて人千餘を為り、被せるに黒衣を以てし、夜城下に縋るし、潮の兵は争いて之を射、久しく乃ち其の蒿人なるを知る。矢數十萬を得る。其の後復た夜人を縋し、賊は笑いて備えを設けず、乃ち死士五百を以て潮の營を斫る。潮の軍は大いに亂れ、壘を焚き而して遁げ、追奔すること十餘里。潮は慚じ、兵を益して之を圍む。

■**[張巡の計略に令狐潮は退く]**巡は郎將の**雷萬春**をして城上に於いて潮と相聞せ使め、語未だ絶えず、賊弩は之を射、面に六矢中たり而るに動かず。潮は其の木人なるを疑い、諜をして之を問わ使め、乃ち大いに驚き、遙に巡に謂って曰く、

「向に雷將軍を見、方に足下の軍令を知る矣、然れども其の天道を如何！」

巡は之に謂って曰く、

「君は未だ人倫を識らず(未だ君臣の倫を識らざるをいう)、焉んぞ天道を知らん！」

未だ幾くもなくして、出で戦い、賊將十四人を擒とし、斬首(斬道×)は百餘級。賊は乃ち夜遁げ、兵を収めて陳留に入り、敢えて復だ出でず。

■【捕虜を分別して脅従の兵を帰す】之頃して、(12-280p)賊の歩騎七千餘衆は白沙渦(開封中牟縣に白沙鎮有り。河南省開封道、現・鄭州市中牟縣)に屯し、巡は夜襲撃し、大いに之を破る。還り、桃陵(司馬彪郡国志に、東都燕縣に桃城有りと、燕縣は唐、滑州胙城縣と為す)に至り、賊の救兵四百餘人に遇い、悉く之を擒とす。其の衆を分別し、媯(直隸省口北道懷來縣、現・河北省張家口市懷來縣)、檀(檀州、京兆密雲縣、現北京直轄市密雲區)及び胡兵は、悉く之を斬る。滎陽、陳留の脅従の兵は、皆な散じて業に歸ら令む。旬日の間に、民の賊を去り來歸する者は萬餘戸あり。

【関東の情勢、常山・山東・南陽】

■河北の諸郡は猶ほ唐の為に守り、常山太守の王輔は賊に降らんと欲し、諸將は怒り、球(續は毬)を撃つに因り(騎馬打毬)、馬を縦ちて之を踐殺す。時に信都太守の烏承恩の麾下に朔方の兵三千人有り、諸將は使者の宗仙運を遣わして父老を帥いて信都に詣り、承恩を迎えて常山に鎮す。承恩は辭するに詔命無きを以てし、仙運は承恩を説いて曰く、

「常山の地は燕、薊を控え、路は河、洛に通じ、井陘之險有り、以て其の咽喉を扼するに足る。頃屬々車駕は南遷(蜀に入ること)し、李大夫(李光弼)は軍を収めて退きて晉陽を守り、王太守(王承業)は權に後軍を統べ、城を擧げて賊に降らんと欲す、衆心は従わず、身首處を異にす(首を斬られること)。大將軍の兵精は氣肅にして、遠近敵莫く、若し家(續は國家)を以て念と為し、移りて常山に據り、大夫と首尾相い應ずれば、則ち洪勳盛烈、孰れか與に比を為さん！若し疑い而して行かず、又た備えを設けずして、常山は既に陥れば、信都は豈に能く獨り全からん！」

承恩は従わず。仙運は又た曰く、

「將軍は鄙夫之言を納れざるは、必ず兵の少なきを懼れるが故也。今人は生を聊んぜず、鹹な國に報いるを思い、競いて相い結聚し、郷村に屯據し、若し賞を懸けて之を招けば、旬日ならずして十萬も致す可し。朔方の甲士三千餘人と相い參して之を用いれば、王事を成すに足らん。若し要害を捨てて以て人に授け、四通(信都は夷庚四達す、之に居りて以て自ら安んず可きに非ざるを言う)に居り而して自ら安んじれば、譬えば倒に劍戟を持つが如し、敗を取る之道也。」

承恩は竟に疑いて決せず。承恩は、承珙(烏承珙は213 卷開元二十年にあり)の族兄也。

■【史思明は九門で負傷】是の月、史思明、蔡希德は兵萬人を將いて南に九門を攻める。旬日、九門は偽りて降り、甲を城上に伏せる。思明は城に登り、伏兵は之を攻める。思明は城より墜ち、鹿角は其の左脅を傷つけ、夜、博陵に奔る。

■【顏真卿は靈武に蠟丸で伝達】顏真卿は蠟丸(文字を隠して秘密の通信に使われた蠟製の球体)を以て表を靈武に達す。真卿を以て工部尚書と為し御史大夫を兼ねしめ、前に依りて河北招討、採訪、處置使とし、並せて赦書を致し、亦た蠟丸を以て之を達す。真卿は河北の諸郡に頒下し、又た人を遣わして河南、江、淮に頒つ。是に由りて諸道は始めて上の靈武に於ける即位を知り、徇國之心は益々堅し矣。

■【河北の郭子儀の靈武合流】郭子儀等は兵五萬を將いて河北より靈武に至り、靈武の軍威は始めて盛んなり、人は興復之望み有り矣。八月、壬午(18)朔、子儀を以て武部尚書、靈武長史と為し、李光弼を以て

戸部尚書、北都(武后天授元年に太原を以て北都と為し、)留守と為し、並びて同平章事とする、餘は故の如し。光弼は景城、河間の兵五千を以て太原に赴く。

■是より先、(12-281p)河東節度使の王承業の軍政は修まらず、朝廷は待御史の崔衆を遣わして其の兵を交(此れ与えて、彼之を受ける)す、尋いで中使を遣わして之を誅す。衆は承業を侮易し、光弼は素より平らかならず。是に至り、敕して兵を光弼に交せしむ、衆は光弼を見、禮を為さず、又た時に兵を交せず、光弼は怒り、収めて之を斬り、軍中は股慄す。

■回紇 吐蕃回紇可汗、吐蕃の贊普は相い繼いで遣使して國を助けて賊を討たんと請う、宴賜し而して之を遣る。

■癸未(19)、上皇は制を下し、天下に赦す。

■賀蘭進明は江淮徵税を進言北海太守の賀蘭進明は録事參軍の第五琦を遣わして蜀に入りて事を奏せしめ、琦は上皇に言つて、以為く、

「今方に兵を用い、財賦を急と為す、財賦の産する所は、江、淮多きに居る、乞う臣に一職を假せ、軍をして用に乏しき無から使む可し。」

上皇は悦び、即ち琦を以て監察御史、江淮租庸使(開元十一年に宇文融は句當租庸地に除せられる。此れ租庸使の始めなり。その後に韋壘・楊国忠が相繼ぎて之と為る)と為す。

■史思明は九門に克つ史思明は再び九門を攻め、辛卯(27)、之に克ち、殺す所は數千人。兵を引いて東に蒿城を囲む。

■雍丘の張巡は李庭望を撃退李庭望は蕃、漢二萬餘人を將いて東に寧陵、襄邑を襲い、夜、雍丘城を去ること三十里に營を置く。張巡は短兵三千を帥いて掩撃し、大いに之を破り、殺獲は太半なり。庭望は軍を収めて夜遁げる。

■靈武使者は蜀到達癸巳(29)、靈武の使者は蜀に至り(七月甲子に肅宗は即位。是に至りて凡そ三十日、使者方に蜀に至る)、上皇は喜んで曰く、

「吾が兒は天に應じ人に順う、吾は復た何をか憂えん！」

丁酉(33)、制す、

「今より制敕を改め誥と為す、表疏には太上皇と稱す。四海の軍國の事は、皆な先ず皇帝の進止を取り、仍ほ朕に奏して知らしめよ。上京を克復するを俟ち、朕は復た事を預からず。」

己亥(35)、上皇は軒に臨み、韋見素、房瑁、崔渙に命じて傳國寶玉冊を奉じ靈武に詣りて位を傳える。

■辛丑(37)、史思明は蒿城を陥す。

【安祿山の動向】

■皇帝の音楽を洛陽に移す初め、上皇は酺宴する毎に、先ず太常の雅樂(唐の初めに祖孝孫・張文収の定める所の樂なり。玄宗は樂を分けて二部と為す)、坐部(堂上に坐して奏する坐部伎、六種あり、燕樂・長壽樂・天授樂・鳥歌萬歲樂・龍池樂・小破陣樂)、立部(堂下に立ちて奏する立部伎、八種あり、安舞・太平樂・破陣樂・慶善樂・大定樂・上元樂・聖壽樂・光聖樂)を設け、繼ぐに鼓吹(鼓吹署令の掌る所の鏡歌・鼓吹曲)、胡樂(龜茲・疏勒・高昌・天竺・諸部の樂)、教坊(内教坊及び梨園の法曲)、府縣(京兆府及び長安萬年の兩赤県)の散樂、雜戲を以てす。又た山車(車上に棚閣を施し加えるに綵繪を以てし、山林の状を為す)、陸船(竹木を縛りて船の形を為し、飾るに綵繪を以てし、人を中に列す)を以て樂を載せて往來す。又た宮人を出して《霓裳羽衣》(玄宗の時に河内節度使楊敬述は霓裳羽衣の曲十二遍を献ず)を舞わせる。又た舞馬百匹(馬を盛飾して左右に分

けて舞わしむ。首を奪い尾を鼓し、縦横、樂節に^{たてまつ}応ずを教えて、杯を銜み壽を上らしむ。又た犀、象を引いて入場し、或は拜し、或は舞う。安祿山は見而して之を悦び、既に長安に克ち、命じて樂工を搜捕し、樂器、舞衣を運載し、舞馬、犀、象を驅り皆な洛陽に詣らしむ。

■**[玄宗の欠陥]**臣光曰く、聖人は道德を以て麗わしと為し、仁義を樂しみと為す。故に茅茨土階、惡衣菲食と雖も、(12-282p)其の陋を恥じず、惟だ奉養之過ぎて以て民を勞し財を費すを恐る。明皇は其の承平を待み、後の患いを思わず、耳目之玩を殫くし、聲技之巧みを窮め、自ら謂えらく帝王の富貴は皆な我に如かずと、前に能く及ぶもの莫く、後に以て逾えるもの無から使めんと欲す、徒に己を娛しましむるのみに非ず、亦た以て人に誇る。豈に知らんや大盜(安祿山の事)が旁に在るを、已に窺竄之心有り、卒に致鑾輿の播越、生民の塗炭を致す。乃ち知る人君は華靡を崇び以て人に示すは、適々大盜之招と為すに足る也。

■**[樂工の雷海清を殺す]**祿山は其の群臣に凝碧池(唐六典に洛陽禁苑の中に、芳樹・金谷の二亭・凝碧の池有り)に於いて宴し、盛んに衆樂を奏す。梨園の弟子(211 卷開元二年にあり)は往往歔歔して泣下る、賊は皆な刃を露わして之を睨む。樂工の雷海清は悲憤に勝たず、樂器を地に擲げ、西に向かいて慟哭す。祿山は怒り、試馬殿の前に縛し、之を支解(体をバラバラにする)す。

■**祿山**は向日百姓が亂に乗じて多く庫物を盗むを聞き、既に長安を得、命じて大いに索めしむること三日、其の私財を並せて盡く之を掠む。又た府縣に令して推按せしめ、銖兩之物も窮治せざるは無し、連引搜捕し、支蔓は窮まり無し、民間は騒然とし、益々唐室を思う。

■**[安祿山勢力は江南を取れず]**上が馬嵬を離れて北行してより、民間は相い傳える、

「太子は北して兵を収め來たりて長安を取る」

と、長安の民は日夜之を望み、或は時に相い驚いて曰く、

「太子の大軍は至る矣！」

則ち皆な走り、市裡は空と為り、賊は北方の塵起こるを望見し、輒ち驚きて走らんと欲す。京畿の豪傑は往往にして賊の官吏を殺し、遙に官軍に應じる。誅し而して復た起これば、相い繼ぎて絶えず、賊は制する能わず。其の始め京畿、廊、坊より岐、隴に至るまで皆な之に付き、是に至りて西門(長安城の)之外は率ね敵壘と為る、賊の兵力の及ぶ所の者は、南は武關を出でず、北に雲陽(隨以來、京兆に属す。陝西省関中道涇陽県の北三十里、現・咸陽市涇陽県)を過ぎず、西に武功(隨唐は京兆に属す。陝西省関中道、現・咸陽市武功県武功鎮)を過ぎず。江、淮は奏す、

「請う貢獻して蜀に之き、靈武に之く者は、皆な襄陽より上津(漢の漢中長利県の地、梁は南洛州を置く。北魏は改めて上州と曰う。隋は州を廢し、上津県と為す。唐は商州に属す。湖北省襄陽道鄖西県の西北140里)の路を取り扶風に抵らん」

と、道路は壅がる無き(扶風は東西南北の交流の要衝)は、皆な薛景仙之功也。

■**[趙郡・常山の陥落]**九月、壬子(48)、史思明は趙郡を圍み、丙辰(52)、之を抜く。又た常山を圍み、旬日にして、城陥つ(郭子儀の戦力が靈武に抜かれた影響かも)、數千人を殺す。

■**[建寧王の倓は才略有り]**建寧王の倓は、性は英果にして、才略有り、上に従いて馬嵬より北行し、兵は衆けれども寡弱にして、屢々寇盜に逢う。倓は自ら驍勇を選び、上の前後に居り、血戦して以て上を衛る。上は或は時に過ぎて食を求(統は未)め、倓は悲泣して自ら勝えず、軍中皆な目を屬して之に向う。上は倓を以て天下の兵馬元帥と為し、諸將を統べて東征せ使めんと欲し、李泌は曰く、

「建寧は誠に元帥の才なり。然れども廣平は、兄也。若し建寧の功成れば、豈に廣平をして吳の太伯と為さ使む可き乎！」

上は曰く、

「廣平は、塚嗣(嫡長子)也、何ぞ必ずしも元帥を以て重きを為さん！」

泌は曰く、

「廣平は未だに位を東宮に正さず。今天下は艱難にして、衆心の屬する所は、元帥に在り。若し建寧の大功既に成れば、陛下は以て儲副と為さざらんと欲すると雖も、(12-283p)同じく功を立てる者は其の肯えて已まん乎！太宗、上皇(天下を定める功有るを以て大統を承けるを謂う)は、即ち其の事也。」

上は乃ち廣平王の叔を以て天下の兵馬元帥と為し、諸將は皆な以て焉に屬す。倓は之を聞き、泌に謝して曰く、

「此れ固に倓之心也！」

■[肅宗新政権の体制づくり]上は泌と出でて軍を行^めり、軍士は之を指して、竊に言^めて曰く、「黄を衣る者は、聖人(天子)也。白を衣る者は、山人也。」

上は之を聞き、以て泌に告げ、曰く、

「艱難之際、敢えて相い屈するに官を以てせず、且く紫袍を衣以て群疑を絶つべし。」

泌は已むを得ず、之を受ける。之を服し、入りて謝す。上は笑いて曰く、

「既に此を服す、豈に名稱無かる可けんや！」

懐中の敕を出し、泌を以て侍謀(創めて以て泌を置く)軍國、元帥府行軍長史と為す。泌は固辭し、上は曰く、

「朕は敢えて相臣とするに非ず、以て艱難を濟^すう耳。賊の平らぐを俟ち、高志を行^すうに任せん。」

泌は乃ち之を受ける。元帥府を禁中に置き、叔入れば則ち泌は府に在り、泌入れば叔も亦た之の如し。泌は又た上に言^めて曰く、

「諸將は天威を畏れ憚り、陛下の前に在り、軍事を敷陳するに、或は懐う所を盡くす能わず。萬一小差あれば、害為ること甚だ大なり。乞う先ず(諸將をして)臣及び廣平と熟議せ令め、臣は廣平と從容として奏聞し、可なる者は之を行^い、不可なる者は之を已めん。」

上は之を許す。時に軍旅の務めは繁く、四方の奏報は、昏より曉に至るまで虚刻無し、上は悉く府に送ら使む、泌は先ず開き視、急切なる者及び烽火有れば、重ねて封じて、門を隔てて通進し(凡そ宮禁官府の門側に、輪盤を置き、或いは夜に遇いて門已に閉じたる後、外に急切の文書有れば、諸を輪盤に納れ、旋轉して内に向かい、以て之を通じる)、餘は則ち明けるを待つ。禁門の鑰契は、悉く叔と泌とに委ねて之を掌らしむ。

■[ウイグルに支援要請]阿史那從禮は九姓府(河曲にあり)、六胡州の諸胡數萬衆を説き誘いて、經略軍(唐末の宥州、天寶に經略軍を靈州城内に移し、宥州を經略軍に寄治す)の北に於いて聚め、將に朔方を寇さんとし、上は郭子儀に命じて天德軍(大同川に在り、烏喇特旗の西北)に詣りて兵を發して之を討たしむ。左武鋒使の僕固懷恩之子の玢は別に兵を將いて虜と戦い、兵は敗れ、之に降る。既に而して復た逃げ歸り、懷恩は叱し而して之を斬る。將士は股慄し、一が百に當らざる無く、遂に同羅を破る。上は朔方之衆を用いると雖も、兵を外夷に借りて以て軍勢を張らんと欲し、豳王之承宗を以て敦煌王と為し、僕固懷恩と興に回紇に使いし以て兵を請わしむ。又た拔汗那の兵を發し、且つ城郭諸國(北狄は水草を遂う、行国と為す。西域諸國は皆城郭有り。故に之を城郭諸國と謂う)に轉諭せ使め、許すに厚賞を以てし、安西の兵に従いて入りて援け使む。李泌は上に勸む、

「且く彭原に幸し、西北の兵の將に至らんとするを俟ち、進みて扶風に幸し以て之に應じるべし。時に於いて庸調(軍料となる)も亦た集まり、以て軍を贍^{にぎ}わす可し。」

上は之に従う。戊辰(4)、靈武を發す。

■内侍の邊令誠は復た賊中より逃げ歸り、上は之を斬る。

■[房瑁が軍国の事を掌る]丙子(12)、上は順化(上は慶州安化県を改めて順化郡と為す。甘肅省涇原道慶陽県、現・慶陽市慶陽県慶城鎮)に至り。韋見素等は成都より至り、上に寶冊(金銀装飾の冊封文書、皇帝の権威を示す重要証書)を奉り、上は肯えて受けず、曰く、

「比このごろ中原は未だ靖からざるを以て、權に百官を總べるは、豈に敢えて危きに乗じ、遽に傳襲を為さん！」(12-284p)群臣は固く請い、上は許さず、寶冊を別殿に置き、朝夕之に事えること、定省之禮(禮記に、凡そ人の子たる者は昏に定めて晨に省すと)の如し。上は韋見素が本は楊國忠に附く(前卷天寶十三載十四載にあり)を以て、意に之を薄んず。素より房瑁の名を聞き、虚心にして之を待つ。瑁は上に見えて時事を言うに、辭情慷慨す。上は之が為に容を改む。是に由りて軍国の事は多く瑁に謀る。瑁も亦た天下を以て己が任と為し、知れば為さざる無く、胸臆に専決す。諸相は手を拱きて之を避ける。

■[張良娣に七寶鞍]上皇は張良娣に七寶鞍を賜り、李泌は上に言つて曰く、

「今四海は分け崩れ、當に儉約を以て人に示すべし、良娣は宜しく此に乗るべからず。請う其の珠玉を撤して庫吏に付し、以て戰功有る者を俟ちて之を賞すべし。」

良娣は閣中より言つて曰く、

「鄰里之舊(続は郷里之舊、良娣の母は新豊に家し、泌は京兆に居る、故に然りい)なるに、何如ぞ是に至る！」

上は曰く、

「先生は社稷の計を為す也。」

遽に命じて之を撤せしむ。建寧王の倓は廊下に於いて泣き、聲は上に聞こえ、上は驚き、召して之を問ひ、對えて曰く、

「臣は比禍亂の未だ已まざるを憂う、今陛下は諫めに従ふこと流れの如し、日ならず當に陛下が上皇を迎えて長安に還るを見ん、是を以て喜び極まり而して悲しむ耳。」

良娣は是に由りて李泌及び倓を惡む。(後に皇后となる、伏線)

■上は嘗て従容として泌と語りて李林甫(東宮を動揺すること 215 卷天寶五載六載にあり)に及び、諸將に敕して長安に克てば、其の塚を發き、骨を焚き灰を揚げしめんと欲す。泌は曰く、

「陛下は方に天下を定める、奈何して死者に仇するや！彼の枯れた骨は何をか知らん、徒に聖德之弘からざるを示す耳。且つ方に今賊に従う者は皆な陛下之仇也、若し此の舉を聞けば、恐らくは其の自ら新たにする之心を阻む。」

上は悦ばず、曰く、

「此の賊は昔日百万朕を危うくす、當に是の時、朕は朝夕を保たず。朕之全くするは、特に天幸耳！林甫も亦た卿を惡む、但だ未だ卿を害するに及ばず而して死する耳、奈何して之を矜あわれまん！」

對えて曰く、
「臣は豈に知らざらんや！以て言う所の者は(續は欠如)、上皇は天下を有つこと五十年に向々とし、太平娛樂し、一朝にして意を失ひ、遠く巴蜀に處る。南方の地は惡しく、上皇の春秋は高く、陛下の此の敕を聞けば、意うに必ず以て韋妃を用いる之故と為し、内に慚じて憚らざらん。萬一感憤して疾いを成せば、是れ陛下は天下之大を以て、君親を安んずる能わず。」

言未だ畢わらざるに、上は流涕して面を被り、階を降り、天を仰ぎて拜して曰く、

「朕は此に及ばざりき、是れ天が先生をして之を言わ使むる也！」

遂に泌の頸を抱き泣いて已まず。

■[家事は上皇の命を待つ]他夕、上は又た泌に謂つて曰く、

「良娣の祖母は、昭成太后之妹也、上皇の念う所なり。朕は位を中宮に正さ使め、以て上皇の心を慰めんと欲すが、何如や？」

對えて曰く、

「陛下は靈武に在り、群臣が尺寸之功を望むを以て、(12-285p)故に大位を踐めば、己に私するに非ざる也。家事に至りては、宜しく上皇之命を待つべし、歲月之間を晩くするに過ぎざる耳。」

上は之に従う。

南詔南詔は亂に乗りて越嶲(嶲州)會同軍(當に越嶲會川県に在り、瀘津関の要路に當るべし)を陥し、清溪關(大定城北にあり)に據る。尋傳(俗は絲續無く、荆棘を跣履し、以て苦と為さず。豪猪を射て其の肉を生食し、戦うに竹を以て頭を籠め、兜鍪の如くす)、驃國(驃は古の朱波なり。永昌の南二千里にあり)は皆な之に降る。

令和8年1月15日 翻訳開始 11909文字

令和8年1月16日 翻訳終了 24064文字